

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370279

研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義文学における「オリент」の包摂と「ヨーロッパ」文学の創出

研究課題名(英文) Appropriation of the Orient and the Formation of European Literature in British Romanticism

研究代表者

後藤 美映 (GOTOH, Mie)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20243850

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、イギリス・ロマン派文学がオリентを包摂することによって、近代ヨーロッパ文学という革新的詩作を創出する契機を得たことを明らかにした。

具体的には、明治時代の日本というオリентにおいて、イギリス・ロマン主義文学が受容された際に顕著になった東西の文学的、美学的差異は、イギリス・ロマン主義文学が主客の二項対立的な認識構造における主体的自律的自己をその存立要件とすることであった。しかし、キーツの詩作におけるオリентのイメージは、ヨーロッパとオリентが遭遇し融合する主客混交の世界観によって形成されており、その混交性こそが知の自由な循環を促す革新的詩作をもたらしたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research explored possibilities in which the appropriation of the Orient allowed the British Romantic poets to formulate a new modern European literature.

Interestingly, British Romantic poems' acceptance in Japan is conceived as advancing process which required the Japanese poets to challenge the prevailing codes in Japanese literary heritage, as British Romantic poetry deviated from Japanese codes of perception by dividing the subjective self and the objective world grounded in strict demarcation.

However, Keats's poems marked the heterogeneous terrain between the subject and the object--the West and the Orient, which enabled the poet to generate an innovative and modern embracing of European literature.

研究分野：英文学

キーワード：ロマン主義 オリент

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の学術的背景

ロマン主義文学研究において、ロマン主義文学とは、イギリス、フランス、ドイツといった国ごとに峻別される文芸活動として従来研究されることが多いといえる。しかし、ロマン主義文学を「ヨーロッパ」という大きな地勢図に再配置し、ナポレオンによるフランスの台頭とその専制政治に対抗するイギリス、独立を目指すイタリア、統一国家建設を希求するドイツといった当時の政治状況を視座に据え、「自由」と「解放」を鍵にロマン主義文学を包括的に捉え直すことが可能だと考えられる。また、ヨーロッパ諸国のメトロポリタンを焦点化した各国のロマン主義ではなく、ヨーロッパの周辺都市であるイタリアのピサ、イギリスのリバプール、スイスのコペーといった都市から知の変革を目指し、コスモポリタニックな知の循環と拡散を目指した文学としてロマン主義を捉え直すことも可能である。

こうした研究は、一国主義的な文学研究の陥穽を突いて、国を超えて流動する知のダイナミズムの中にロマン主義文学を再定義する研究といえる。さらに、このような研究動向におけるヨーロッパという地理的空間は、「オリент」という「他者」の領域にまでその範囲を拡大している。ヨーロッパ以外の領域との接合点において見られる衝突、占有、融合といった状態を通して、ヨーロッパはその存在を自ら再定義するという意味において、「ヨーロッパ」とは、従来の圏域を超えた地勢図に再配置して捉え直される。

### (2) これまでの研究の経緯

本研究の着想に至るまでは、コックニー詩派と称されたロマン派第二世代の詩人たちが、イギリスの美学的政治的改革を企図するために、イタリアを詩的源泉とし、特に近代文学の父としてダンテを範にしたことの意義を明らかにしてきた。そしてこの研究をさらに発展させ、ロマン派第二世代の詩人たちが、ダンテの翻訳/改作を通して、「近代」文学の創出を企図したが、彼らが希求した近代性とは何かについて具体的に研究を進めてきた。

このような研究成果の中で、イギリス・ロマン派第二世代の詩人達がダンテを受容することによって生み出す理想の近代文学を新しい「ヨーロッパ」文学と呼んだことに着目し、本研究では、旧来のヨーロッパを超越した、再定義される「ヨーロッパ」とはどういう意義を担っているかについて研究を行った。そして、ヨーロッパの中の「オリент」ともいえるイタリアと同様、ロマン派詩人たちが「オリент」をどのように受容し、そこに見出される新しい文学の可能性によって、いかに「ヨーロッパ」文学を再構築しようとしたかについて研究を行った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、オリент世界を包摂することによって、イギリス・ロマン派第二世代の詩人たちが再定義を試みる、新しい「ヨーロッパ」文学像を呈示することである。サイード的なオリエンタリズムの弊害としてみなされる、一義的な西洋と東洋の支配関係を超えて、ヨーロッパがオリентと遭遇することによって、知と言語とが循環する空間へと変容し、多義的な意味を帯びていくことを明らかにすることが、本研究の目的といえる。また、イギリス・ロマン主義文学におけるイタリアとオリентの関連性や近代ヨーロッパ文学という定義を明らかにすることは、これまでのロマン派文学研究に新しい視座を提供することになるとと思われる。

18世紀中頃から19世紀初頭のヨーロッパにおける「オリент」とは、例えばアルバニア、エジプト、北アフリカ、インド等であった。また、当時のオリентとは、支配する側の「西洋」、植民地として支配される側の「東洋」という単純な支配関係の中に収まりきれない存在であったといえる。例えば、Shelleyの*The Revolt of Islam*で女性化されたオリентは、性の逸楽という解放と、再生のための力を与えてくれるトポスとして表象されるといえる。しかし、そもそもこの女性化されるオリентの文化的歴史的背景には、18世紀以来、奢侈を西側に供給する土地としてのオリентが存在し、物資の交易を通して贅沢と消費の快楽を西洋に伝染させ、墮落させる「感化力」を持つ脅威としてのオリентが存在した。さらに、オットマン帝国の専制政治に見られるように、オリентとは、専制を誇る強大な力を象徴する政治的脅威でもあった。すなわち、オリентは、大いなる「不安」を掻き立てる「他者」として西洋に魅惑を与えつつも脅威として存在したのであった。

Friedrich SchlegelやNovalisらが唱えたように、そうした多義的な意味を孕んだオリентこそが、ロマン主義の最高の形態を生み出し、美学的、空間的に閉塞し、慣習と化した詩的イメージの限界を超えるための地となり得る。オリентの世界は、ヨーロッパが普遍だと考えた言語では「翻訳」できない世界であるがために、使い古されたイメージの刷新を図ることができると考えられる。しかし、最も重要なことは、未知の世界に遭遇したロマン派の詩人達が、オリентの世界に対し、身体的な違和感を感じ、その当惑の中で自己に内在する他者を見出すことである。そうした経験によって、自己は再定義され、オリентに対するヨーロッパも再定義されるのである。

したがって、オリентがロマン主義文学において包摂されるという文学的手法は、「ヨーロッパ」という概念を再構築する手法と連動しているのである。すなわち、ロマン派詩人達がダンテを包摂することによって、

近代的な詩作を見出そうとする手法は、ヨーロッパの中のオリентであるイタリアを通して、自己を再定義する手法である。ロマン主義文学においてイタリアが担う意味合いは、オリент世界が担う意味合いと通底するものであるといえるのである。こうした思考の手続きを追うことによって、ロマン主義文学が希求する新たな「ヨーロッパ」文学の意義とオリентの存在意義について研究を行うことを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 平成 26 年度

平成 26 年度の研究は、6 月 13 日から 15 日に東京大学において開催された北米ロマン派学会の国際学会 Romantic Connections において、“The Invention of Landscape: Keats’s Influence on Modern Japanese Poetry”と題した口頭発表を中心に行った。この発表は学会後、その論考が評価され、欧米のロマン派研究を牽引する電子ジャーナル Romantic Circles に掲載される予定となった。

したがって、平成 26 年度は、上記国際学会の口頭発表とその後の成果発表としての論文の作成を中心に行い、研究方法としては、1880 年から 1910 年にかけての明治期の日本の詩歌とイギリス・ロマン主義文学との影響関係を明らかにするための資料収集とテキストの精読を主なものとした。収集した資料・図書としては、日本の詩歌の第一次資料はもちろん、図版や絵画といった視覚的資料等までを含めた資料の収集を目指した。さらに、美学、日本文学の批評書を中心とした第二次資料の収集も行い、最新の批評動向への目配りも行った。

また、国際学会での口頭発表と、その後の論文作成において、海外の研究者らと議論する機会を得ることができ、研究を進展させるための重要な指針を得ることができた。

#### (2) 平成 27 年度

平成 27 年度の研究は、前年度アメリカの電子ジャーナルに掲載が確定した英語論文“The Invention of Landscape: Keats’s Influence on Modern Japanese Poetry”について、数回にわたるピア・レビューを経た後に論文の推敲を行うことと、英国ロマン派学会の国際学会での口頭発表を中心に行った。英国ロマン派学会の国際学会 Romantic Imprints では、7 月 16 日にイギリスのカーディフ大学において“Sensation Imprinted on the Mind: Keats’s Corporeal Imagery”と題した口頭発表を行った。

したがって、平成 27 年度は、上記論文の作成と国際学会の口頭発表を中心に行い、研究方法としては、一年目に収集した資料の不足を補う資料収集を前年度と同様に行うと同時に、イギリス・ロマン主義文学関連図書および医学、政治、美学といった、当時の広範な言説を包括的に捉えるための資料・図書

の収集とその精読を行った。

また、北米ロマン派研究の電子ジャーナルに論文を掲載するにあたり、多くの海外の研究者らと議論する機会や英語の校正といった支援を得る機会を得て、研究を国際的な見地で進めることができた。

#### (3) 平成 28 年度

平成 28 年度の研究は、4 月 23 日に名城大学において開催された、沖縄ロマン派文学研究会と九州山口イギリス・ロマン派文学研究会との合同研究会で「キーツの詩とオリент」と題して行った口頭発表とその論文作成とを中心とした。

したがって、最終年度の研究方法は、上記の発表と論文作成のための資料収集であり、イギリス・ロマン主義文学関連テキストやオリエンの言説を形成する文学テキスト、当時の旅行記、文芸批評といった広範な資料の収集と精読を行った。また、今後の論文作成のための基礎資料となる論考である、「ヨーロッパの形成とイギリス・ロマン主義文学」をまとめた。

### 4. 研究成果

本研究において、イギリス・ロマン主義文学がオリエンをどのように包摂し、その結果、いかにして新しい「ヨーロッパ」文学の創出を目指すに至ったかについて、以下の 3 点から順に考察を重ね、イギリス・ロマン主義文学とオリエンとの関連を具体的に明らかにした。

#### (1) オリエンから眺めた西洋的認識構造

まず、「オリエン」を定義する際、オリエンは、西洋的主体に対する「他者」として配置されるという認識構造の中に布置される。すなわち、主客という二項対立の認識構造という前提があって、西洋と東洋の存在が布置されること自体に西洋中心的な思考が存在している。したがって、オリエンの場からイギリス・ロマン主義文学を眼差すことによって、イギリス・ロマン主義文学が有する美学的特質を浮き彫りにすることができる。

そのため特に、明治時代の日本というオリエンがどのようにイギリス・ロマン主義文学を受容したかについて考察を行った。西洋の言説によって形成されたオリエンではなく、オリエンの場においてどのように西洋が受容されたかを考察することは、東西の文学的、美学的差異を照射することに通ずる。すなわち、1880 年から 1910 年の明治時代の日本の詩歌が、60 年から 90 年の年数を経て 19 世紀初頭に書かれたイギリス・ロマン派の詩を受容した際、最も顕著となった東西の文学的、美学的差異は、自己と外界との境界が存在するか否かであった。

日本の近代詩人たちは、漢文脈の中で涵養されてきた美学的規範によって詩歌を創作

し、個人と社会、もしくは、自己と外界といった明確な二項対立の世界観を有していなかったといえる。しかし、明治の文人は、イギリス・ロマン主義文学を受容することによって、西洋化という変容を受け入れるのであるが、この変容によって、イギリス・ロマン主義文学が有していた、認識する主体と、観察され、描写される外界という二項対立の認識構造を自らのものにする必要があった。したがって、明治期の日本文学は、いわば、風景という外界に埋没した自己を、外界を歌うために自律した自己として立ち上げるといふ認識の変容を経験した。そして日本文学は、詩人の内的世界が自己の強い感情の発露とともに拡張し、外界とのダイナミックな融合を果たすという場において、西洋的「風景」を生み出したのである。

こうした日本文学における、自己と外界との対立の不在は、ロマン主義文学における主客の二項対立構造の存在とは、大きくかけ離れた文学的特質であった。言い換えれば、イギリス・ロマン主義文学は、ポスト・デカルト的認識構造である、自己と外界との対立を有し、認識主体である自己を中心とした創作といえる。この場合、西洋における主体としての位置をすでに獲得したロマン主義文学が外界としてのオリエントをどのように包摂するかが問題の焦点となる。エドワード・サイードによって指摘されてきた、優位に立ち、自己定位のためにオリエントを観察する西洋の主体が保持するオリエンタリスト的視点を、イギリス・ロマン主義文学においても読み込むことができるのか問題となる。

## (2) キーツの詩とオリエント

上記(1)において明らかになったイギリス・ロマン主義文学とオリエントとの関係性を、具体的にキーツの詩におけるオリエントの詩的イメージの分析によって明らかにした。

19世紀初頭のキーツの時代は、オリエントを舞台とした多くの物語や、実地調査による報告書といった出版物や活字によって、オリエントを複層的なイメージによって表象し、そのイメージを拡張していく時代であったといえる。そして、そのイメージは、未知への驚異の念と、帝国主義的力を背景にした物質的消費の対象としてのオリエントに基づいていたといえる。興味深いことに、パルテノン大理石像やギリシャの甕の美を賛美し、Hellenistとしての側面を強調されるキーツの詩にも、異国趣味的、異教的オリエントが、詩的イメージとして顕著に織り込まれている。こうした時代背景において、キーツの詩におけるオリエントとは、優位に立つ視座から占有し、自己定位のために眺めるといふ、オリエンタリスト的視点によってのみ成立する場ではなかったことを明らかにした。キーツの詩におけるオリエントは、ヨーロッパとオリエントが遭遇し融合することによっ

て、新しいイメージを提供する場となり、そのイメージがキーツの詩に独自性と革新性をもたらしした。

例えば、『エンディミオン』や『ハイペリオン』において、オリエントがもたらす新しい詩的イメージの革新性とは、当時の物語詩や叙事詩に要請された美学的趣味から逸脱する、イメージの過剰さと鮮烈さという特徴であった。そうした特徴は、ギリシャ古典の正統な世界やイギリスの風景が、オリエント世界と同列に配置される混交した世界観の中において求められる。

また、“Bright star”や“When I have fears”の中で歌われるように、あるいは、名優 Kean を評したキーツの劇評や、*Paradise Lost* に登場する Satan の姿を評したキーツの言葉にみられるように、イメージの革新的な鮮烈さは、新しい世界に対峙する詩人の「孤高の」強い眼差しによって、他者と一体化し、自他とが混交した世界観の中に求められるといえる。すなわち、キーツの詩におけるオリエントとは、イギリスの狭隘な空間性を超え、見慣れた詩の語句を超え、過剰ともいえる奔放なイメージによる未知の表現を呈示するものであったことを明らかにした。

## (3) 近代ヨーロッパ文学の創出

上記(2)において明らかになったように、キーツの詩においてオリエントが機能した役割とは、西洋の特質的認識構造である主体と外界という二項対立構造を揺るがすことであったといえる。こうした主客の認識構造は、ヨーロッパ内部でも応用され、イタリアはロマン派の時代において、いわば「オリエント」として見なされていたといえる。具体的には、イタリアの中世の詩人であるダンテを、イギリスのロマン派詩人達が改作して受容した際に問題となったのは、シェイクスピア、ミルトン、スペンサーらの伝統的なイギリス文学の遺産に、イタリア文学を移植することの是非であった。すなわち、イタリアは、ヨーロッパ内部の他者として認識されたことによって、イギリス文学の伝統にとっては脅威となり得た。しかし、キーツ、シェリー、バイロンらによって、イタリア文学は空間的、美学的に狭隘なイギリスを超えるための「解放」の契機となったのであった。

さらに、特筆すべきことは、イタリアの批評家、ウーゴ・フォスコロによる批評に顕著なように、ダンテは近代ヨーロッパ文学の創始をなすと考えられたことである。ダンテの近代性とは、コールリッジやシェリングが評価するように、詩人の自己とその内面的感情の表出に内在し、自己の感情の表出と、『神曲』の全体的統一とが調和していることであった。すなわち、『神曲』に具現化される、個人的自己と全体性、個別と普遍の共存は、国家間における国力の拮抗や思想の対立を宥和へと導き、普遍的理性によって連帯する個々人の平等な存在の在り方を示すもので

あった。ロマン派第二世代の詩人たちは、ダンテの詩が呈示する、個別と普遍との間を往還する知の循環を、「ヨーロッパ」という地理的空間に応用し、そこで生み出される近代ヨーロッパ文学の可能性を模索したといえるのである。

以上のような3点において研究の具体的な成果を得たが、特に、北米ロマン派学会の国際学会での発表と、電子ジャーナル Romantic Circles における論文採択は、日本におけるロマン主義文学研究が国際的な評価につながった成果であり、今後の日本のロマン主義文学研究を大いに推進するものである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

後藤 美映、「キーツの詩とオリエント」、『福岡教育大学紀要』、査読有、第66巻、2017、15-26.

Mie GOTOH、“Invention of Landscape: Keats’s Influence on Modern Japanese Poetry”、Romantic Circles: Praxis Series、査読有、2016.  
<https://www.rc.umd.edu/praxis/eastasia/praxis.2016.eastasia.gotoh.html>

[学会発表](計 4件)

後藤 美映、「キーツの詩とオリエント」合同研究会(沖縄ロマン派文学研究会、九州山口イギリス・ロマン派文学研究会) 2017年4月23日、名桜大学.

Mie GOTOH、“Sensation Imprinted on the Mind: Keats’s Corporeal Imagery”、BARS 2015 International Conference: Romantic Imprints、2015年7月16日、Cardiff University.

後藤 美映、「感情の美学における視覚性と身体性—キーツの『ハイペリオン』におけるダンテの受容と詩の改革」九州山口イギリス・ロマン派研究会、2014年12月15日、福岡大学.

Mie GOTOH、“Invention of Landscape: Keats’s Influence on Modern Japanese Poetry”、NAARS 2014 International Conference: Romantic Connections、2014年6月14日、東京大学.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

後藤 美映 (Mie GOTOH)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：2024850